

# 地点『地下室の人々』の舞台裏

## アートの現場から

### ACCAC通信

国際芸術センター青森（ACCAC）では、昨年12月末から今年3月にかけて「表現のコンズ」と題し、様々なジャンルの芸術、表現活動に触れられるイベントを開催しています。来る1月23日、24日には京都を拠点とする劇団「地点」の新作『ワークインプログレス公演「地下室の人々」』を行います。近代ロシアの文豪、フョードル・ドストエフスキー『地下室の手記』（1864年）を中心に、関連作品も取り入れてテキストを再構成・カラージュ（切り貼り）し、一人語りが延々と続く原作に、独自の視点を入れ上演されます。



これまでパフォーマンスやコンテンポラリー・ダンスの公演は数多く行ってきたACCACですが、現代美

術の表現を中心としているため、演劇公演を実施することは珍しいことです。展示棟の屋外は円形劇場を思わせる建築になっていますが、ギャラリー内は音の反響が激しく、言葉が重要となってくる演劇公演には不向きな環境です。言葉の抑揚やリズムを俳優の声と身体によってすらすらと、発

言することの特徴がある地点だからこそ、この空間を逆手にとったアプローチも期待出来るのではないのでしょうか。また今回は、現代が生バンド演奏ではありませんが音楽を、コンタクト・ゴソのメンバーで写真家としても活躍する松見拓也が舞台の重要な構造を作り出す映像を、数々の舞台や展示作品の照明デザインを手掛ける藤原康弘が照明を担当し、カラーボレーショアンタースローでの『地下室の人々』稽古の様子

今、秋田育ちである演出の三浦基は、高校時代に金木の斜陽館に宿泊したこともあり、北東北には思い入れがあるそう。大宰治の短編をもとにした「トカトン」と『駈込ミ訴へ』や後期のテキストを再構成した『グッド・バイ』も地点で上演しています。今回、札幌公演に続いて来青することにになりましたが、ACCACのレジデンスという特性を考慮し、いまここでしか見られない新作立ち上げを行ってもらうことになりました。雪深いACCACは地下室のようでもあり、自意識ゆえに地下室という自らの殻に閉じこもる『地下室の手記』の男もまた、現在の状況とよく合うように思えます。

公演は、1月23日、24日の両日午後3時から、入場無料（投げ銭制）、要予約。終演後にはトークも予定しています。

アンタースローでの『地下室の人々』稽古の様子

このことです。ちなみに、地点の本拠地である京都の劇場、アンタースローは地下にあり、2016年には『地下室』という雑誌も発行されていました。

アンタースロー（青森公立大学国際芸術センター）青森学芸員 慶野結香

※第1金曜日掲載。今回は掲載日を変更しました